

激動の繊維業界で自社を  
発展させ、その先を見据える

福井経編興業株式会社

取締役会長

野坂 鐵郎 氏

トップの

The president's real face

素顔

vol. 16



### Profile

昭和29年10月、福井市生まれ。昭和56年に同社入社。昭和60年に同社代表取締役社長、平成30年には取締役会長に就任。  
平成5年に福井青年会議所の理事長就任、平成15年には福井経済同友会の常任幹事など公職を務めた。現在は福井商工会議所 繊維・工業部会 部会長を務める。

### DATA

創業：昭和19年  
電話：0776-52-3306

本社所在地：福井市西開発3丁目519-3  
従業員：79名

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は福井経編興業株式会社の野坂鐵郎氏にお話を伺いました。

### 「家業を継ぐ「宿命」」

野坂家は明治期になり、醤油醸造業を始め、併せて織物業を開始し、明治19年には「野坂機業場」を設立した。大正時代には隣接の現松本3丁目の土地を購入し事業の拡大を図った。戦時中の昭和19年には県内4社、石川県2社の合計6社の経編機を集結し、福井経編興業(株)を設立した。戦災に遭い、戦後の復興と共に同社が規模を広げていく中で野坂氏が生まれる。この年の春、創業者である祖父・鐵太郎氏が亡くなり、「創業者の生まれ変わり」という願いも込められ「鐵郎」と名付けられた。野坂氏は幼い頃から「家業を継がなければならないという宿命」を感じていたと当時を思い返す。

中学時代は進明中学校で陸上部に所属。エレキバンドを通じた友人にも恵まれながら学生時代を過ごした。その間、繊維業界は劇的な環境変化に直面する。昭和40年代に進展した「日米繊維交渉」による繊維の対米輸出規制で、福井の繊維産業も大きなダメージを受

けた。こうした状況の中、野坂氏は大  
学を卒業し、昭和53年に三菱商事株  
式会社に入社。鉄鋼原料を扱う部門に配  
属され、営業マンとして鉄鋼メーカー  
との取引に従事した。この三菱商事時  
代に妻と出会い、結婚する。結婚を機  
に、野坂氏は26歳の時に三菱商事を退  
職し、家業に戻ることもあった。

## 「社長への就任と事業展開」

こうして同社に就職した野坂氏は、  
経編製造部門と自社商品（製品）部門  
を経験し、特に製品部門を統括した際  
は四国の通販会社や、関西地方の訪問  
販売会社などと販売ネットワークを構  
築した。転機が訪れたのは昭和60年。  
当時社長だった父が急逝し、31歳で社  
長に就任した。当時は「やるべきこと  
をやる」ことに注力していたと野坂氏  
は振り返る。しかし、日米繊維交渉に  
続いて同年「ブラザ合意」が発表され  
る。急激な円高により日本の輸出業は  
大打撃を受け、世界に繊維製品を展開  
していた同社にも大きな影響を与え  
た。野坂氏はこの危機を「製品部門の  
提案力強化」「設備投資による生産性  
の向上」を推進して乗り切った。特に、  
積極的な設備投資により、経編業界に  
おける国内屈指の生産力を得るに至っ

た。これが、現在も同社の重要な経営  
基盤になっている。

また、同社の製品部門では世界情勢  
の影響を受けつつも、海外展開に挑戦  
していった。現在も、中国とカンボジ  
アに拠点を構え、野坂氏も月に1回そ  
れぞれを訪問して、生産力と品質の向  
上に努めている。特にカンボジアにお  
いて、野坂氏は図書館の設立に大きく  
寄与し、現地への貢献も続けている。  
こうした海外拠点も大事にしなが  
ら、同社は営業を続けている。



右:カンボジアの子供たちと野坂氏  
左:中国のスタッフとの集合写真

## 「プライベートでは洋蘭の育成や ゴルフに精を出す」

プライベートでは、自宅で洋蘭の育  
成も手掛けている野坂氏。洋蘭栽培は  
30年続けており、ふくい洋らん会の会  
長も務めており、毎年3月には「福井  
洋らん展」が開催されている。洋蘭は  
高山植物に似た特性を持ち、温度管理  
が難しい。近年の夏季の酷暑対策とし  
て、室内温度を自動調整するA-1搭載  
のエアコンを導入した。



自宅で栽培する洋蘭

もう1つの趣味はゴルフ。同社でも  
ゴルフコンペを開催する一方で、他団  
体主催のゴルフコンペにも参加してい  
る。インドアゴルフにも通い、3年前  
にはホールインワンを経験した。

## 「古希を迎えて」

野坂氏は一昨年に70歳となった。祖  
父・父とも60代で亡くなったため、古  
希を迎えられたことを感慨深く感じて  
いる。コロナ前は後進に道を譲ること  
も考えていたが、コロナ禍による混乱  
で予定変更を余儀なくされ、特に海外  
での事業計画に遅れが生じた分のテコ  
入れに注力している。また、日米繊維  
交渉やブラザ合意の経営危機を乗り越  
える力の源泉となった製品部門につい  
ても、自身が先頭に立って改革を進め  
ていきたいと意気込む。

古希を迎えたことで一区切りを感じ  
ていた野坂氏だが、まだまだやりたい  
ことは多く、最近では90歳になっても働  
き続けていて、100周年記念の挨拶  
をしている夢を見たという。「まずは  
目の前の課題を解決し、次の世代へ繋  
いでいくことが今の使命だ」と語る野  
坂氏。経営者となり40年目となったが、  
同社の更なる発展に向けて着実に歩み  
続けていく。